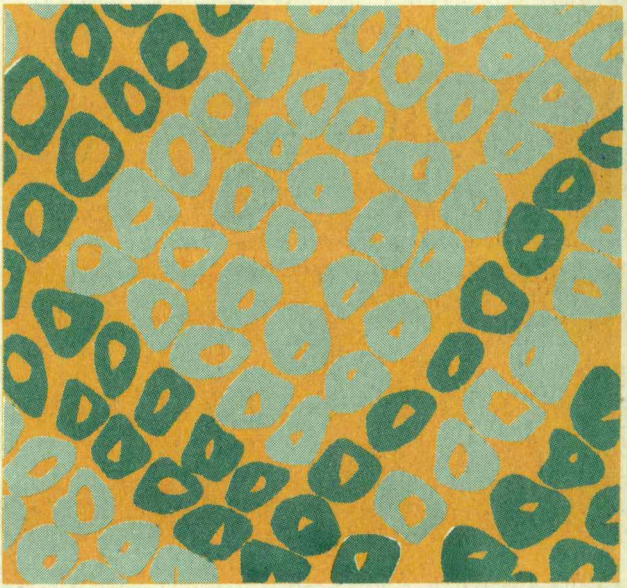
笠間選書
9

原典をめざして

——古典文学のための書誌——

橋本不美男著

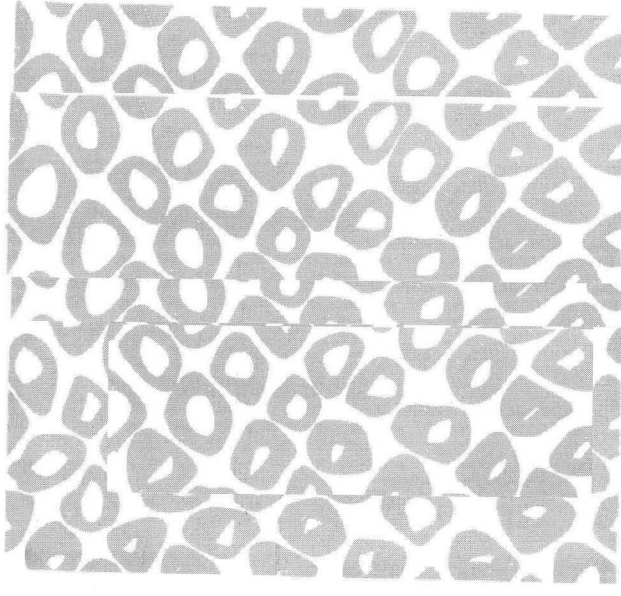


笠間書院刊

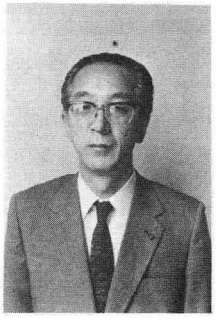
原典をめざして

——古典文学のための書誌——

橋本不美男著



笠間書院刊



橋本不美男
（はしもと　ふみお）
1922年８月15日，東京に生まれる。
1944年９月30日，日本大学法文学部文学科（国語国文学専攻）卒業。
現在：宮内庁書陵部図書調査官，東洋大学・学習院大学講師。
著書：『院政期の歌壇史研究』『御所本三十六人集』『王朝和歌史の研究』等
現住所：〒176 東京都練馬区小竹町1-78

笠間選書９　原典をめざして——古典文学のための書誌
昭和49年７月20日初版発行
定価 1,000円
著者　橋本不美男©
発行者　池田猛雄
写真植字　イイジマ・トレース
印刷　モリモト印刷株式会社
製本　笠間製本所
発行所　有限会社笠間書院
〒101 東京都千代田区神田神保町1-46
電話03-294-0787・0996 振替東京56002
書籍コード　1390-953009-0924

『原典をめざして——古典文学のための書誌』目次

一、はじめに……三

1作家と表現…三　2古典研究と原典遡源…四　3最古の原本…七

二、古典作品の原典復原——『土左日記』の場合……一〇

4古典享受とそのテキスト…一〇　5原典復原への道程…一一　6原典復原の漸進…一四

7伝本新発見の価値…一八　8原典の復原…二〇　9『土左日記』原典の形態…二三

三、古典本文と孤本……二五

10孤本（こぼん）ということ…二五　11孤本としての継色紙（つぎいろし）——『古今集』との関係…二七　12孤本とその証本性…三〇　13孤本の宿命…三二　14孤本の種々…三五　15孤本と鑑賞本文…三八

四、古典作品と錯簡——『更級日記』の場合……四二

16『更級日記』の夢…四二　17半世紀前の『更級日記』…四三　18文献批判の試行錯誤…四六　19錯簡の発見…四九　20錯簡の実状…五〇　21錯簡により知られる諸伝本の

書写態度…五一　22享受者の夢…五四

五、古典作品の本文の混乱……五七

23本文混乱の一つの原因(造本)…五七　24和本の製本…五九　25装幀のはじまり…六〇　26奈良時代の装幀…六二　27古代の書籍——書写・校合…六六

六、装幀の歴史と種類……七〇

28紙と糊づけによる装幀の変化…七〇　29巻子本——巻物仕立…七四　30巻子本の位相…七六　31折本——帖…八〇　32旋風葉…八〇　33冊子本、草子ということ…八一　34王朝の草子…八四　35王朝の草子造り——目的・料紙・書写と綴じ…八七　36粘葉装…九三　37列帖装(綴葉装)——一帖の紙数と大きさ・書き方・綴じ方…九六　38大和綴…一〇四　39糸綴じ——線装への過程…一〇五　40袋綴(和装・和綴)——紙釘装・くるみ表紙・糸綴じ…一〇八　41粘葉装・胡蝶装・列帖装・大和綴、名称混乱の実状…一一三　42表紙、書名…一一六

七、古典作品の本文異同Ⅰ——編集過程における異同……一一八

43作品の本文形成(なぜ本文の異同がおこるのか)…一一八　44編集された作品…一二一　45『拾遺和歌集』の場合——『如意宝集』と『拾遺抄』…一二三　46『拾遺抄』の諸本の関係…一二五　47『拾遺集』の伝本系統…一三〇　48流布本と堀河本の対校(本文批判の第一歩)…一三一　49『拾遺集』の流布本と堀河本の相違の検討——詞書の相違・作者名表記の相違・和歌本文の相違・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

歌数歌序の相違…一三九　50流布本と堀河本との関係…一五五　51異本（堀河本）と抄との関係…一五五　52『拾遺集』における抄と異本と流布本…一五六

八、古典作品の編集……一六〇

53『金葉集』の場合…一六〇　54『新古今集』の場合…一六二　55作品編集の実態――私家集の草稿本と清書本…一六六

九、古典作品の本文異同II――享受過程における異同……一七二

56平安時代における作品享受と本文（片桐洋一）…一七三

一〇、古典の本文と奥書……一八四

57古典作品の本文現状…一八四　58本文と奥書との関係1――三巻本枕草子の奥書…一八六

59三巻本『枕草子』の奥書と本文との対応（岸上慎二）…一九四　60奥書と本文との関係2…二〇六　61『異本業平集』の本文現状…二〇九　62『異本業平集』の本奥書…二一二

63『異本業平集』の本文と奥書との関係…二一四

一一、奥書の諸相……二一八

64河内本『源氏物語』の奥書…二一八　65古写経の奥書…二二一　66家の証本の奥書…二二五

67伝来の証本の実態…二二八　68二条家および冷泉家の相伝本奥書――『古今集』『後撰集』『拾遺集』…二三一　69家説伝受奥書…二三八

三、消息・贈答と詠歌……二四二
70消息・贈答…二四二　71日常の詠歌とその書留め…二四三　72詠歌の料紙――ふところ紙(懐紙)・畳紙、色紙…二四六　73和歌の交換と「ふみ」…二五〇　74文の実態――書き様(散らし書き)、包み文、結び文、立(竪)文…二五一　75文の交換…二五五
一三、歌会と詠歌……二五七
76詠歌様式とその料紙…二五七　77懐紙――一首懐紙、二首懐紙等…二六一　78短冊――歌会における短冊、現存する短冊和歌、短冊の故実…二六七
一四、詠草と色紙……二八〇
79詠草…二八〇　80竪詠草…二八〇　81横詠草(折紙詠草)…二八三　82色紙…二八六　83色紙形…二八六　84規定化された色紙…二八九
あとがき……二九二

原典をめざして——古典文学のための書誌

一、はじめに

1　作家と表現

昭和二十年代の前半、国語国字問題が最終段階に達した時(国語表記の公的な改訂)、いわゆる新かなづかい・当用漢字に対して、最も強く反撥したのは小説家・詩人達であった。このように作家達は、自分が使用する文字とか表現に、自らの美意識・創作感情をかけているわけである。たとえ文法的に適当でない表現をつかい、または独自の造語をつかったにしても、そこにはその作家独得の表現意識があり、極端にいえば、われわれはこれを認めなければならないのかも知れない。

このように作品は、汎時代性も勿論あるが、一面には作者の強烈な個我の凝集ともいえよう。近年の文学全集・文庫本で、近代作家の作品を読もうとすると、当用漢字・現代かなづかいに改められていることが多い。このことに、私も含めて、ある種のとまどい、抵抗感をもつ人は意外におおいと思われる。これは現在、広い意味で近代作家と類似的世代に属するものが多いことと、ある時点を画して公的に国語表記の方法が改められたという二点に主たる理由があろう。ともかくも、当用漢字・現代かなづかいでは、作品の表現とか作家のイメージが浮かばないという人々が相当いることは確かであるし、また一方、すこしも抵抗感なく、それなりに作品の理解・鑑賞に入っていける人々(現代表記ではじめから教育された)が、はるかに多いことも事実である。

では、この現代表記による近代作家の作品を、その作家の原作であり証本(原本的なもの)であると認めてよいのであろうか。やはり現代表記に改められた作品は、昭和四十年代なりの意識的な鑑賞のための本文(鑑賞本文)とも称すべきであって、原作・原本とは程遠いもの(内容的でなくて形態的に)というべきであろう。

この近代文学の作者と作品と現在の享受本文との関係は、質的な差違はあるが、図式的にはそのまま古典文学の場合にあてはまると思われる。近代文学の場合は、わずか数十年の歴史であって、表記の変化は専ら法的措置という不自然な理由による。これに対して古典文学の場合は、千年にもおよぶ時日の経過による、様々な原因のつみかさねがある。千年もしくは数百年の間には、国語史的な変化はあろうし、思想・文化・社会情勢も移っていく。また、各時代の属する階層によっても、個人個人でさえも教養の差はあろうし、古典を享受する(書写してそれを鑑賞する)理解の仕方にも微妙な相異があったと思われる。従って、歴史的にみて、異る時代、異る階層の人々によって享受され、継承されてきた現存する古典文学作品の本文は、成立当時の原本そのままで受けつがれていないことは、むしろ当然のことであるのかも知れない。

2　古典研究と原典溯源

さて、古典文学の作品を研究するためには、まずその作品を読むことからはじめなければならない。この作品を〝読む〟ということは、すなわち、作品を一応成立時点に引もどし、その上で〝正しく理解し鑑賞する〟という解釈作業(判断)を行うことである。従って、作品研究の第一歩である〝読む〟ことのためには、理想的にいえば、その作品の原本を探しだして、それをテキストにして読むのが最良であることは勿論である。

ところが、近世以降の文学作品の場合は、作者の稿本あるいは自筆本、または初版本に対する改版本等の発見によって、比較的創作過程も推定できるし、原本ないしは原本的なものをテキスト(影印ないし活字化されたものも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

含む)として読める可能性も少くない。これに対して、中世以前の作品に関しては、歌会・歌合・詠草などの和歌文学の少数作品を除くと、原本が現存するものは殆んどない。従って、中世以来、作品の原典遡源への努力が、今日に至るまでつづけられているわけである。

この原典遡源への努力は、作品内容の解釈(判断)をより正確にするための、作品本文への批判(テキスト・クリティーク)である。成立が極めて古く、原本などというものは、雲か霞のかなたにある『竹取物語』に対しても、

写本之外、又以両本校合、改誤了　(写本のほか、また両本をもって校合し、誤りを改めおわんぬ)〔御所本『竹取物語』奥書〕

のように、底本(書写する場合に、そのもとにした写本)のほかに、二部の写本を探し出し、それぞれと対校して底本の誤りを直している。これは少しでも、その本文に客観性をもたせようとする努力(この方法は一面、三本による合成本文を作るという危険もある)を示すものであって、たとえ無意識的ではあっても原典遡源へつながるものであろう。

また、

①写本未校歟、不審多之、以証本可校合也　(写本いまだ校さざるか、不審これ多し、証本をもって校合すべきなり)〔御所本『秋風和歌集』奥書〕

②すべてこの六帖いかにやらん、いづれも〳〵かくのみしどけなき物にて侍れば、本のまゝにしるしをく、のちに見人心えさせ給べし〔『古今和歌六帖』本奥書〕

のように、いずれもが作品の証本を求める意識は強くあらわれているが、①は底本の証本性を疑い、後の人に証本との対校を期待したり、②は当時の伝本(伝存している諸本)のいずれもが、全く証本性のないことに対して、自分の書写態度を示し、後人に注意を付記していることである。このように証本をもとめる気持は、享受＝書写

者の共通の願いであったのであろう。

そのティピカルな例として、つぎの奥書をあげてみよう。

①建長七年五月十六日、中風右筆、慇終書写之功　特進前亜相戸部尚書藤原(花押)　(中風の右筆、なまじいに書写の功を終う　正二位前大納言民部卿藤原　右筆とは文章を書くこと)

②以校　奏覧之本、漸〻校合　(奏覧の本をもってただす、漸々校合す、　漸々とは急がずすること)

③中風筆跡、狼籍雖不被見解、撰者之自筆、何不備証本哉　融覚　(中風の筆跡、狼籍にして見解けられずといえども、撰者の自筆、なんぞ証本に備えざらんや　融覚は藤原為家の法名)

④文永二年四月付属大夫為相了　桑門(花押)　(大夫為相に付属しおわんぬ、　桑門は僧侶のこと)

以上の記載は桂宮本『続後撰和歌集』の本奥書(底本にあった奥書)にみられる。

これによると、『続後撰集』の撰者為家は、奏覧後四年目に手控え本を底本として、中風気味(五十八歳)のふるえる手で『続後撰集』を書写した①。②はその本を底本とし、後嵯峨上皇の御手許にあった自らの奏覧本(巻子本)を借り出し、丹念に校合しこの集の証本を作った。③は中風気味の乱筆で読みにくいかも知れないが、撰者(自分)が奏覧本と校合して自ら写した本だから立派な証本であろう。という為家みずからの証明である。④はこの証本を、その子冷泉為相にあたえた記事で、以後、冷泉家相伝の証本となる証明である。

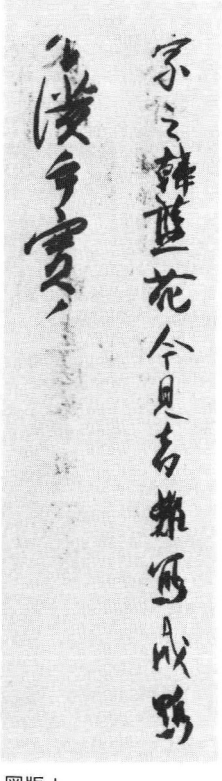
勅撰集は奏覧(勅撰下命の天皇または上皇の御手許に差出し、御覧に入れる)の正本が原本であって、撰者自筆本であっても手控え本はあくまでも草稿である。従って為家は、手控え本を底本とし、奏覧本とゆっくり校合して、はじめて『続後撰集』の証本をつくり得たわけである。またなぜ証本をつくったかというと、歌道の家である二条家に対し、おなじ職掌の別家をつくるであろう末子の冷泉為相にあたえるためだったことが知られるのである。しかしこの桂宮本『続後撰集』は、冷泉家相伝本の近世初期の転写本であり、その間に幾度かの転写の可能性

もあり、そのままでは証本と認めることは出来ない。しかしながら、この為家の冷泉家相伝証本を作成する意識は、とくに和歌の家としては、勅撰集の証本をもととして、すべての創作・指導・研究を行わねばならないとする、強い意図のあらわれとみることが出来よう。このように中世以来(三代集等の場合は中古から)、古典作品の原典を求め、あるいはそれにかわる証本を作成し、それによって研究・鑑賞することが第一義であるとする意識は強かったものと思われる。

3　最古の原本

さて古典文学作品の原典遡源の具体例はのちにのべることにして、果して奈良・平安時代の作品原本は現存しないのであろうか。いささか、こじつけ気味ではあるが、ここに稀有の例として、現存最古の原本と、参考のため最古写の例とを紹介しよう。

図版1が、その原本すなわち自筆の和歌詠草である。これは天平末から天平宝字年間にかけて、国営の写経所(諸国の国分寺等へくばるため経巻を写す役所)の書記兼写経生であった他田水主(内藤乾吉氏説)が、勤務に倦んだ時か、控えの公文書の裏に書きつけたものである。



図版1

□家之韓藍花今見者難写成鴨

□潢手実

とよめる。左側は、裏の公文書の内容を示す端裏（第一紙裏の左上に、書名・内容などを記す）で、〔裝〕潢手実（経巻製本の実績報告書）と書かれてあったと思われる（正倉院文書続々集第五帙第二巻、写千部法華経経師等手実帳、天平勝宝元年（七四九）八月二十八日附紙背）。

右の和歌については、故武田祐吉博士は欠部に「妹」の字を推定され、

妹家の韓藍の花今見ればうつし難くもなりにけるかも

と訓読されている。写経所の庭に咲く韓藍の花（『万葉集』三首とも女性に譬える）をふと見て、恋人を想い手許の反古に落書する、といった状況が眼にうかぶ。とにかく身分は低いが、八世紀の知識階級である一職業人の創作和歌の原本である。

つぎの図版2は、法隆寺五重塔の内部の組木の面に書かれた落書である。これは山崎一雄氏により赤外線写真で撮影され、はじめて判読が可能になったものである。左側の墨書をたどってみると、

奈尓波都尓佐久夜己　（なにはつにさくやこ）

図版2

とよめる。第二句の途中までではあるが、すぐ想起するのは、

難波津に咲くやこの
はな冬ごもり今は春べと咲くやこの花

の一首である。この歌は古今集序に「あさか山」の歌とともに、歌の父母のようだと記述され、古注は仁徳天皇即位の際(三三)の王仁の詠としている。また法隆寺は、再建・非再建の両説があるが、いずれにしても七世紀初頭か八世紀はじめに書かれたことになる。万葉集には「なにはづに」の初句をもつ歌は三首あるが、二句以下は全く異る。以上からして、六・七世紀から著名な伝誦歌であったと思われる「なにはづにさくやこのはな」の歌を、五重塔造立のとき、屋根裏作業のあい間にふと思い出して、書きつけたものであろう。恐らく無名の工人の所為ではあろうが、これを現存する最古の伝写(写本とはいえないから)とみておこう。

二、古典作品の原典復原――『土左日記』の場合

4　古典享受とそのテキスト

現在われわれが古典を読む場合、どのようなテキストによっているであろうか。一般の社会人が趣味として、〝日本の古典とはどんなものか〟を知るためには、数種類出版されている口語訳の古典叢書をテキストとして読む場合も多いであろう。しかしながら、古典文学を生な本文で読みたいと思う人々は、朝日新聞社刊の「日本古典全書」とか、岩波書店版の「日本古典文学大系」、また口語訳もあるが小学館版「日本古典文学全集」などによる場合が多い。

さらに専門的に研究したい人、又は日本文学の専攻を志す学生諸君は、特殊のテキストを求めるものと思われる。この場合、写本なり版本なりを使うのはごく限られた専門研究者であって、他は活字本であろう。これらのテキストのほとんどは、その編者(校訂者)の学問的結論にもとづく、限定された一写本を底本とする活字翻刻本である。ところが『源氏物語』を例にとってみても、五十四帖完備した、あるいは数帖かけている写本だけでも、『国書総目録』によると百数十部の多きをかぞえ、版本にしても慶長古活字版以下幾種類もある。これに『国書総目録』にもれた個人の所有のもの、あるいは数冊、各帖単独のものを加えれば、莫大な量に達するであろう。これは、『古今和歌集』『枕草子』等の場合についても同様で、伝存本(現存している本)の量の相違はあっても多数の伝本が存在している事実に差はない。編者は、その多量の写本(鎌倉期から江戸期にいたる)の中から、一写本を撰

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook